

高齢者をはじめサポートが必要な人の外出を支援する介護技術の専門家「トラベルヘルパー」の活躍で、高齢者の旅の選択肢が広がっている。2009年に始まった認定資格を持つヘルパーは年々増え、現在は500人以上に。今年から大手旅行会社も参入するなど、利便性も向上している。

高齢者の旅行 選択肢広がる

増える「トラベルヘルパー」

「近所の墓参りに行きたい」という小さなお出掛けから、「かわいい孫の結婚式に出たい」「もう一度、あの思い出の場所に」といった希望までかなえてくれるヘルパー。バリアフリー化が進む日本だが、まだ整備が行き届かない場所も多く、潜在需要は大きい。



趣味のカメラで、開聞岳を撮影する板橋昌利さん（右から2人目）。左端は介護タクシーの運転手。2010年、鹿児島県

有資格者 500人以上 大手旅行会社も参入

車椅子で段差を乗り越える手伝いだけでなく、長い階段を引っ張り上げる際に声を掛けて手助けする人を探すなどの補助も大事な仕事だ。気晴らしの散歩で、話し相手になるケースも。埼玉県春日部市の山口初位さん(60)は85歳だった父板橋昌利さんと10年、鹿児島を訪れた。板橋さんは旧日本軍の元特攻隊員。「沖繩に散った仲間が最期に目にした薩摩富士(開聞岳)を、自分も死ぬ前に一度、見ておきたい」と話していたが足腰が弱り、車椅子生活を余儀なくされていた。

「どう行くか」考える 沖縄県うるま市 町挙げて養成研修



「トラベルヘルパーの養成に町を挙げて取り組むのが、沖縄県うるま市だ。同地域雇用創造協議会が開催したヘルパー養成研修をのぞいた。

参加者は地元病院や介護施設の職員、介護タクシーの運転手ら。経験を持つ人々だ。きっかけを尋ねると、「施設のお年寄りを連れ出してあげたい」「運転だけでなく幅広い手伝いができれば、もっと多くの方に沖繩を楽しんでもらえる」などの声がかかった。ヘルパーの仕事は「高

齢者が行ける場所」を選ぶのでなく、「その場所に行か」を考へること。交代で車椅子に乗って実際に人気の観光地を訪れると、「バリアー」の存在を痛感する。

山口さんはヘルパーを紹介する「あ・える倶楽部」と連絡を取り、担当したヘルパーの宇田川広子さんは車椅子でも搭乗可能な航空機を手配。板橋さんは戦友と同じ空から開聞岳を眺め、静かに涙ぐんだという。知覧の史料館では自身が展示されていたのがぎが展示されているのを発見した。板橋さんは昨年死去。「今ごろ、雲の上で知覧の土産

話をしているかも」と山口さん。「たぐさんの人にトラベルヘルパーのことを知ってもらって、どんどん外出してほしい」。JTBは2月から、首都圏発の旅行向けにヘルパーの紹介を始めた。担当者は「ヘルパーが全国各地で増加しつつある」と話し、今後取り扱いエリアを拡大する方針だ。

車椅子のタイヤは意外と小さく、側溝のふたの溝などにはまるので要注意。必ず斜めに横断して脱輪を防ぐ沖縄県うるま市

車椅子のタイヤが側溝のふたの凹凸にはまらないための斜め横断の方法や、階段はタイヤを地面から離さず後ろ向きに引っ張り上げた方が安全なことなどを体験。立位と違い、座って目線が水牛と同じ高さになるとも怖いことにも驚く。沖縄県では、うるま市

協会 篠塚恭一理事長は「空港や駅の案内はバリアフリー対応が進んでいるが、問題はその後。飛行場まで連れていくヘルパーがいて、到着空港から旅行先を案内するヘルパーがいればどこへでも行ける。ITの発達で各地のヘルパーとテレビ電話機能を通じて顔を見ながら話ができ、調整が格段にやりやすくなりました」と力を込めた。